



## ～幕末の志士・岩崎弥太郎、竹内綱も訪れた～ 有田の文化人・正司考祺家



「言志録」に記された佐藤一斎の文字

江戸時代後期に多くの著作をなした博覧強記の文化人・正司考祺は寛政5年(1793)、有田に生まれました。出雲の尼子氏の家系と伝えられ、その後、有田に移り曾祖父の源七郎のころ、陶磁器用の絵筆の販売を家業としたといわれます。幼名を米十、通称を正治といい碩溪と号しました。

### 【江戸遊学と佐藤一斎】

正司考祺は天保3年(1832)、40歳のころに江戸遊学をしています。当時、江戸の昌平坂学問所(昌平黌)教授として活躍していた佐藤一斎や安積良斎あさかてんさいなど一流の学者たちと交流をし、教を乞うためだったのでしょう。正司家の蔵書の中に佐藤一斎の著書「言志録」が含まれています。この「言志録」は学問・思想・人生観など多岐にわたる修養処世の心得が書かれています。また、一斎は門人三千人といわれ、幕末から明治にかけて活躍した西郷隆盛や吉田松陰などにも多大な影響を与えたといわれています。

また、最近では小泉元首相が取り上げたことでも有名な次のような一文があります。

「少(わか)くして学べば壯にして為すことあり、壯にして学べば老いて衰えず、老いて学べば死して朽ちず」

これは〈三学戒〉と言われるもので、人生それぞれの年代に学ぶ意義を説き、生涯を通して学ぶ大切さを教えています。

正司家に残った「言志録」の内表紙には「正司君此拙著任有■拜呈 一斎」と朱書きで書かれています。

おそらく、江戸で一斎から直々に正司考祺へ贈呈されたものと思われます。佐藤一斎のふるさと・岐阜県恵那市岩村町在住、佐藤一斎顕彰会の鈴木隆一さんによれば、「この本は文政7年(1824)に刊行された初版本と思われ、しかも一斎の直筆が添えられており大変貴重なものである」とのことでした。

### 【正司家を訪れた志士たち】

当時、「ひらき」と称され、岩谷川内の奥にあった正司考祺家を訪れた人々は多かったようで、来訪者の名を記した「芳名録」が残されています。そこには佐賀藩内や国内はもとより、中国から長崎を訪れたと思われる画家も多数います。

また、正司家を訪れた年代は不明ながら、後に大財閥・三菱を作り上げた岩崎弥太郎や、土佐藩の民権運動家で後の首相吉田茂の実父・竹内綱などの名前があります。岩崎弥太郎は安政6年(1859)11月、江戸遊学時代に安積良斎塾で共に学んだ佐賀・多久出身の鶴田皓つるたあきら(法制官僚・西杵炭鉱などを経営した高取伊好の実兄)を訪ねています。おそらく、長崎往復の途次に多久や有田を訪れたのではないのでしょうか。ただ、正司考祺自身は安政4年(1857)12月6日に死去していますので、岩崎に会うことはなかったと思われます。

正司考祺は多久の儒者・草場佩川、船山親子や深江順房との交流も深く、多久で何らかの示唆を得ての訪問ではなかったかと思われます。岩崎が訪れたであろう安政の時代、日本を動かした志士たちが見た有田はどのような状況だったのでしょうか。(尾崎葉子)



正司考祺に関しては「有田町史 政治社会編Ⅰ、通史編」を参照ください。また、佐藤一斎による「言志録」は、他に「言志後録」や「言志晩録」、「言志臺録」が刊行され、これらを合わせて「言志四録」といわれています。

# 皿 季刊 山

No.86

夏  
2010

昨年11月から町内のNPO法人アリタ・ガイド・クラブ(大橋康二理事長)と当館の協働で、安政6年(1859)に描かれた「松浦郡有田郷図」を基に、150年の間に変わったもの、変わらなかったものを実際に町内を歩いて確認する活動を行いました。これは(株)花王の「花王コミュニティミュージアム・プログラム2009」の助成を受けて行っているものです。

活動を始めるにあたり、町内外から参加者を募りましたところ、64名の方が応募されました。年齢層も、小学生から80代までと幅広く、まさに老若男女の方々が毎月3回から多い所は6回程の活動を行い、さらには地域の方に昔話を聞いたり、活発な活動がおこなわれました。

その活動の中からいくつか紹介します。

## ② 道の真ん中に残る井戸の跡

泉山ロータリー近くには以前、三角屋といううどん屋がありました。そこで使用されていたと思われる井戸の跡(現在は鉄製の蓋に覆われている)が、道路の真ん中に残っていました。

## ④ 川はどこへ消えた？

古地図にある幹線道路や川筋は、その多くは現在とさほど違っていません。ただ、大樽の商工会議所付近や岩谷川内の旧有田町役場付近は現在、川の流れが大きく変わっていることが確認できました。

## ⑥ 十六善神の正体は？

享保16年(1731)に書かれた「皿山雀」には、ゆるぎ石の近くに十六善神が鎮座していて龍宝院という山伏が守っているとあります。安政の古地図にも現在の金毘羅社境内に十六善神が記されていますが、現在は見当たりません。大神宮への山道に点在する祠がそうではないかというので何度も足を運んで調査しましたが、今もって未確認です。

## ⑧ ピョンピョン橋って何？

岩谷川内地区では川に入っただけの踏査を行いました。いつもとは違う風景が眺められ、川の中には橋の代わりに大きな石が並んでいて「ピョンピョン飛んで渡っていた」ことから名づけられたピョンピョン橋に子ども達は大喜びでした。

## ① 泉山に残る150年前の石垣

安政の古地図には、泉山の年木谷へ登る道から西に入った所に石垣を表したものと思われる部分があります。江戸中期の様子を記した「皿山代官旧記覚書」には皿山の太庄屋だった溝上三郎右衛門という人物がいて、現在、石垣の上に溝上政市さんの住居があります。それらから、この場所に太庄屋の溝上家があったことが推測されます。

## ③ 稲荷社確認のために個人宅“侵入”事件発生

昔の登り窯の近くには、山の神や稲荷社の祠が鎮座していました。窯の安全、焼成の成功を神に祈った証しでもありますが、その稲荷社が個人宅の敷地内にあったため、思わず無断で足を踏み入れ、持ち主にお叱りを受けました。熱心さゆえの出来事で大変ご迷惑をおかけし、申し訳ありませんでした。

## ⑤ 八天社(八天狗)はどこにある？

有田皿山は窯の焼成で火を使いますので防火、火の用心のため、火防の神様として八天狗を祀っていました。現在は陶山神社の拝殿右側に鎮座していますが、安政の古地図では現在の上有田交番の奥にあったようです。いつごろ移転したのかはよくわかりません。

## ⑦ 石炭窯のガラ捨て場

明治期になって、窯の焼成燃料が薪から石炭へ変わっていきましたが、その時に出る石炭がらの捨て場があちこちあって、そこには新たな敷地ができていました。

活動を進める中でわかったこと

活動報告

「150年前の有田皿山を歩く隊」の



### 【今後の予定】

現在、活動も最終段階に入りつつあります。目標は150年前の有田皿山と現在の違いが一目でわかる地図を作製することです。

印刷会社の担当者に二枚重ねの地図を考えているという相談をしたところ、初めての経験で折り曲げることは難しいとのこと。紙質などまだまだ乗り越えなければならない課題があります。

でも、きっと今までにない、素敵な地図を皆さんに披露できるものと思っていますし、さらにはこの地図を持って皿山を歩く会を開催したいと考えています。

## 新指定 有田町の文化財

有田町教育委員会は平成 22 年 4 月 28 日付で、有田町重要文化財として下記の 4 件を指定しました。

新しい有田町になって平成 20 年に 3 件を指定、認定しましたが、それに次ぐものです。

### 青銅製燈籠 1 対 (有田町大樽)



陶山神社境内にあり、高さ約 2 m で脚部に「明治十七年 申十月吉日 大樽町」という文字が刻印されています。また台座には「佐賀郡長瀬町 鑄師 谷口清八」とあります。

陶山神社は明治 4 年 (1871) にそれまでの八幡宮から社号を陶山神社に改めたことが昭和 13 年の「神社寺院祠之調査」にあります。

その祭礼は江戸時代より続いていたようです。

この燈籠は祭礼の神事当番町を執り行った記念として、大樽町から奉納されたものですが、鑄造した谷口清八という人物は明治 16 年に谷口鉄工所を設立しています。谷口家は代々佐賀藩の御用鑄物師で、十代佐賀藩主鍋島直正の時代には大砲やその他の武器を鑄造し、他藩からの依頼にも応じていました。

この燈籠は、製造者、奉納者などの由来が明確であり、有田皿山の近代を物語る資料として貴重なものです。

### 青銅製狛犬

#### 1 対 (有田町大樽)

前述の燈籠と同じく、陶山神社境内の J R 佐世保線の踏切脇にある高さ約 1.8 m の青銅製狛犬で、胴部に「福岡縣筑前国博多厨子町住 鑄造人 深見孫三郎直次、同深見孫平直満、次工大野正直直久」の銘があります。また、台座には「明治十八年酉十月吉日 本幸平町」の刻印があっ

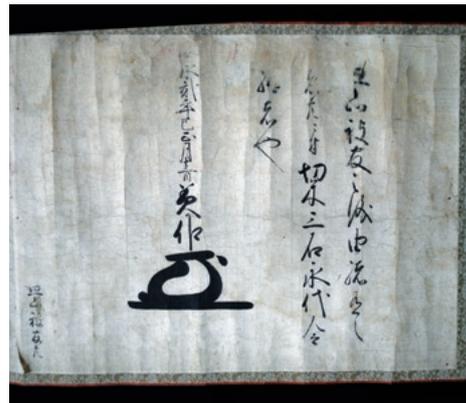


て、これもまた、その年の祭礼の神事当番町であった本幸平町から奉納されたものです。

鑄造人の博多在住の深見氏らは近世博多を代表する鑄物師であり、また、有田町歴史民俗資料館所蔵の巻物にはこの時の祭礼の様子が描かれていて、当時の賑わいや皿山の盛んな様相を伝えています。

燈籠及び狛犬は、いずれも第二次世界大戦の折、当時の岡澤宮司の努力によって金属供出を免れ、現在にその姿を残しています。

### 金ヶ江家文書 3 巻 4 点 (有田町稗古場)



稗古場の金ヶ江家に伝わる古文書で、安永 2 年 (1773) に美作守 (多久家八代茂孝) から下賜された「判物」や「申渡状」、あるいは「御訴訟申上口上」

、「乍恐某先祖之由緒を以御訴訟申上口上覚」などの 3 巻 4 点です。

金ヶ江家は初代金ヶ江三兵衛を祖として始まり、現在も十四代金ヶ江三兵衛氏が作陶の伝統を受け継いでいます。これらの文書は多久家から下賜されたものや後世の子孫によって記されたものですが、17 世紀初頭の有田皿山の磁器焼成に関する記述も多く重要な資料です。

### 大木宿の十八夜祭 (有田町大木)



毎年 8 月 18 日に行われる大木宿区の夏祭。集落内を回った浮立が竜泉寺境内に入り、若者達が二手に別れての一番鉦の奪い合いや、仕掛け花火の「ジャーモン」が披露されます。江戸時代、干ばつの時に行われた雨乞いが起源と言われています。

## 古文書教室研修旅行を開催しました

4月7日(水)、恒例となった古文書教室の初級・中級の受講生25名は、長崎県大村市への研修旅行に行きました。

毎回、好天に恵まれる研修旅行ですが、今回もまた、穏やかな大村湾沿いに車を走らせ、一路大村市へ。まず、富松神社に到着。市街地にありながら、静謐な雰囲気の中の境内の中で参拝し、その後、社務所で久田松和則宮司より、「御使」と呼ばれた人々が残した中世末期から江戸初期の伊勢神宮参拝史料をもとに、有田郷



富松神社社務所にて講話を聞く受講生

からも参拝の記録があることや、「鑿銭」や「お祓い箱」の語源など、大変興味深い講話を聞きました。

その後、大村藩主菩提寺の本経寺境内に残る、歴代藩主やその家族の墓碑を見学し、大村市立史料館ではキリシタン関係の展示品や1万点以上の資料を収蔵している収蔵庫も見学させていただきました。

古文書の中に書かれている事柄を実際にその場所を確認する楽しさもある研修旅行ですが、多くの収穫を得て、無事有田町へ帰りました。

## 川浪筍谷画展開催しました



川浪筍谷さんの図案

陶器市開催の期間をはさんで、5月末日まで有田陶磁美術館で川浪筍谷(養二)さんが描いた画展を開催しました。

川浪さんは有田工業学校から東京美術学校(現東京藝術大学)に進学。卒業後帰省し、有田工業高校などで教鞭をとり、多くの陶芸家などを育て、退職後は深川製磁株式会社に招へいされ、後進の指導を続けました。今回、遺族から寄贈された作品の中から26点を展示しました。

## 新 寄贈資料紹介

このほど有田町大樽の竹重隆治様より、第二次世界大戦時代に国へ供出された金属の代用品の一つとして製造された、磁器製ボタンや当時の絵具顔料などを寄贈していただきました。その数、11,866点。



館員総出で数を当りましたが、この磁器製ボタン製造の技術が、この後、瀬戸や京都などの窯業地とともに有田で製造された陶貨を生み出すことになりました。まさにその“証言者”ともいえます。



また、東京都港区にお住まいの古賀節子様より、明治23年に初版され、大正11年に再版された「陶器小志」の書籍を寄贈していただきました。

これは古賀様の曾祖父である古賀静修氏の著作です。静修氏は弘化3年(1846)多久に生まれ、草場佩川に学び、後に文部省へ出仕。「日本教育史資料」の編纂に従事し、明治27年に帰郷した後は小学校校長を勤め、同29年に死去しました。これは東京在住のころ著されたもので、全国各地の陶業地の歴史を紹介したものです。

## 有田人の書籍 「下内野史」

このほど「佐賀県有田町 下内野史 深城の歴史」が発行されました。一番身近な地域の歴史を次世代に伝えようという思いで、区民の力を結集して編集出版されたものです。

定価1,000円(税込)で販売されていますが、詳しい問い合わせは下内野区(木寺一也区長)まで。



## 季刊『皿山』

通巻86号(平成22年6月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185